

「件」管見

一

人獣か？ 獣人か？ 不思議な人面獣の出現したという噂が間歇的に流行する。

近例は人面犬・人面魚騒動だった。一九八九〔平元〕年夏から翌年春、人面犬目撃談が若者向け雑誌に寄せられ、ラジオ番組に取挙げられたという。一九九〇〔平二〕年には写真週刊誌が「人面犬」の仲間か「悪霊」のたたりか…山形県の寺で怪奇「人面魚」を発見したぞ！▽とのキャプション付で山川静夫の投稿を載せた。^② 鶴岡市・善宝寺内池に棲むコイである。そのズーム・アップ写真をスポーツ雑誌が掲げ、民放ワイドショーが飛びつき、反響を呼んだ。連日一〇〇人以上の観光客が現場を訪れ、菓子店やN T Tが便乗商売を始める騒ぎ、全国的话题になると各地の新聞社に類似情報が

堀 部 功 夫

届いたらしい。^④

世事に疎い私は後から本で知った。その本——際物が多く古書店均一本棚のおかげで拾うことが出来た——は

A 酒井征勇〔編〕『緊急レポート／人面犬を追え！』（勁文社、平2・5・2）

B 山口直樹『怪奇人面の呪い』（二見書房、90・10・25）

C 常光徹『学校の怪談』（講談社、90・11・15 管見本後版）

である。Bがマヤカシモノを含め外国例も示す。人面石・人面樹・人面壁…。そういえばホーソン「人面の大岩」を思い出し、スチーブンソン「メリーメン」にアザラシの発する人語が大災を予言するとの言い伝えも載っていた。外国例は今一寸手が扱げられないので保留する。Cが江戸時代の用例を教えてくれて有益だった。加藤尾庵「我衣」巻十四〔文政二年筆記〕の第二五話と第三五話で

ある。前者の鈴木葉三校訂文を写しておこう。

閏四月の廿九日の夜、日本橋大工町河岸家主作兵衛といふもの、路次へ、白ぶちの犬子を生む。其子彦正にして人面也とて御府内震動して見物に出。町中頗迷惑せし。後には人にもみせず、路次の戸を立切けり。同五月八日伊せやの若イ者専助、手筋を求めて一見したりとて予に物語る。其子夫人面にはあらねども、眼鼻のあたり毛を生せず、猿の面によく似たり。鼻高くして眉毛の形ちあり。母犬も恐れて乳を与へず。大かた四五日の中には死せんといえり。板行にして売歩行しには、前の足人間の手也杯とい、しかども、左にはあらず。やはり白黒斑の犬なりと翌九日物語けり。

第三五話は人面魚の絵を添える。△当四月十八日九州肥前国去る海辺へ上りしを、獵師八兵衛と云もの見付たり。其時此魚の曰、我は龍宮よりの御使者神社姫といふ物也。当年より七ヶ年豊年也。此節コロリといふ病流行す。我姿を画に写して見せしむべし。其病をまぬかれ長寿ならしむると云々△との詞を伴った△板行▽が充られていたむね伝える。

奇形の犬の子が噂の過程で大仰な人面犬へ文字どおり化けていった、第二五話の伝える経緯は興味深い。まったく、兼好の言うとおりに△世に語り伝ふる事、まことはあいなきにあ、多くは皆虚言な

り▽である。この「徒然草」七三段を△マドギワ語▽訳した橋本治が注で人面犬を話題にしているが、若者向適例と脱帽する。

さて人面牛、内田百閒「件」である。

黄色い大きな月が向うに懸かつてゐる。色計りで光がない。夜かと思ふとさうでもないらしい。後の空には蒼白い光が流れてゐる。日がくれたのか、夜が明けるのか解らない。黄色い月の面を蜻蛉が一匹浮く様に飛んだ。黒い影が月の面から消えたら、蜻蛉はどこへ行つたのか見えなくなつてしまつた。私は見果てもない広い原の真中に起つてゐる。軀がびつしよりぬれて(一)尻尾の先からばたばたと零が垂れてゐる。件の話は子供の折に聞いた事はあるけれども(二)自分がその件にならうとは思ひもよらなかつた。からだが牛で顔丈人間の浅間しい化物に生れて(三)こんな所にはんやり立つてゐる。

「件」解題を御浚しておこう。

一九二二(大一〇)年一月一日刊『新小説』二六卷一号所掲「冥途」の△四▽としてPR 106〜112に発表された。翌年二月一〇日、稲門堂書店刊『冥途』に収録(PP 52〜74、ページ付け無し)。正誤・句読点変更(圧倒的に読点付加)・送りがな付加・字体変更のほか、次のような語句改訂九箇所の手が入っている。

初出		初版	
P. I.		P. I.	
107 9	ぼうとり	54 10	ぼんやり
108 17	枚数の上の段段	60 5	枚数の段段
109 8	今日は云はない	62 4	今日ではない
109 9	この様子で見ると	62 5	この様子だと
109 14	見て、厭な	63 4	見て、私は厭な
109 17	どうも思ひ出せない	63 9	思ひ出せない
111 1	廻りに	68 3	邊りに
111 9	それぢや	69 6	それでは
111 15	騒ぎは	70 8	騒ぎが

再版「冥途」(三笠書房、昭9・1・1)では説点^②が削除される。成稿過程は「百鬼園日記帖」「続百鬼園日記帖」^③に明らか。一九一九(大八)年五月四日〆夜、「件」の腹案が出来た。同六日〆昨日すぐに書いて置かうと思つた「件」の腹案もまた何だか少し気が抜けた様な気がする。金の事で時間をつぶして、気乗りのしかけた仕事の鼻を折られるのはしよつちゆうの事だけれども、考へてゐると新しく腹がたつて来る。一九二〇(大九)年八月七日〆朝から「件」を書き始め、午後は午睡をして夜又書き五枚。同八日〆夜「件」を四枚半書いた。同九日〆ひるね、起きてから晩迄に件の後を六枚余り書いて脱稿した。旧稿五篇に加へて、冥途として一先づ雑誌に出すつもり、夜その五篇を選んだ。春陽堂へ手紙を書

いて新小説に出すか出さないかを問ひ合せた。同二五日〆豊島與志雄のうちへ行て冥途を雑誌に出す事を頼む。同九月九日〆夜春陽堂の小野来、冥途を来年の一月号に出す事を約す。既に知られた右経過を繰り返し引くのは、「件」が金策に奔走する合い間に立案されたこと、発表経緯に豊島與志雄が関つていたこと、二点を注意しておきたいためである。

一一

「件」の素材クダンは伝承中に存在する。

早くに豊島與志雄「沈黙」の話^④が紹介し、それに従う研究者もいた。しかし、近頃は〆伝承と結びつかずとの判断(高橋英夫)^⑤すなわち素材のクダン自体から百間の創造とみる説の勢が強い。それで私は「近代文学と伝統文化」(92・5・15『日本近代文学』)にクダン伝承の存在を報告し、注意を喚起した。けれどもいっこうに浸透していない。たとえば拙稿の半年後に発表された文章なのに、高田衛が〆これは近代になっての話だが、内田百閒が「くだん」という妖怪の話をしたとたんに、聞手が「くだん」という妖怪がほんといると思いこんだという。実は人の姿をしていながら、一方から見ると牛の姿をしているという、この妖怪は、「件」という字が人偏と、旁は牛であることから思いついた、内田百閒の冗談だっ

たのだが、彼が「件^{くだん}」という小説を書いたために、しばらくはほんとに「くだん」という妖怪がいると信じた民俗学者がいたという。冗談からコマ、ではなく、冗談からクタンが出たのである。Vと書く、現状である。

前稿で報告したといっても、紙数が限られていたので、やっと記録者名・年次を挙げるに止まり、伝承そのものを——Head以外は——引用できなかつた。話を説得的にするため、採集しえたものをあらためて適及的に並べてみよう。

○三浦秀宥、『荒神とミサキ』（名著出版、89・11・3）p.30でも、『岡山の民間信仰』（日本文教出版、昭52・2・10）p.109でもクタンにふれるが、岡山民俗学会編『岡山民俗事典』（日本文教出版、昭50・5・1）p.118から引く。

くだん 件 人と牛のあいのこととして生まれ、生まれると同時に予言をし、必ず適中すると伝えられ、「よって件の如し」の文句にはこの信仰の反映があるとされている。くだんの信仰の発生や経過については不明の点が多いが、中国山地がその発生地であるという意見もある。新見市豊永には実際にくだんを見たとする数人の老人もいた。生後2〜3日で死ぬものと信じられている。

○鶴藤鹿忠「山中地方の件（くだん）とオオカミ」^⑭（昭46・12・27

『山陽新聞』

蒜山盆地周辺の村々では件（くだん）の予言をしばしば聞く。

八束村のある古老と話しているうち、ふと、来年六月にはまた大戦争が始まるぜと本気でいう。よく聞いてみると件がいったというのである。「どこの件がいうたのですか」と聞くと「それは隣の川上村で生まれた件じゃ」と。「川上村のどの地区ですか」とたずねると「川上村へ行ってみれば川上の人は知つると」と。「改行」川上村へ行って古老に会って聞いてみると「そりや、うちの村じゃない。中和じゃ、中和にや件が生まれ、来年は大豊作だが、はやりやまい（流行病）があるというて四、五日でなくなつたそうな」それではと今度は中和村へ行って聞いてみると「来年は大風が吹く」と件がいったそうな。「それはどこの件ですか」と聞くと「けれは八束じゃ。八束の件がいうたそうな」と。「そのいうこと二言は正しい」「よって件（くだん）の如（ごと）し」である。件は「牛」の子だが「人相^{アツ}をしていて人語を解するものとされ予言をするのである。

鶴藤鹿忠は『岡山県民俗資料調査報告書』（岡山県教育委員会、'67）で新見市千尾地区を調査し「田治村に件が出たそうな」という話を聞いた。件は予言をするが、その予言が当るといふVと報じた。

○立石憲利「人の一生」（昭37・5『岡山民俗』）が久米郡大井西お

百閒作以前の資料もあり、クダンが百閒の△冗談から▽出たわけでは断じてない。

二

前稿でも述べたようにクダン伝承は概ね

- 一、人面牛である、
 - 二、短期間しか生存しない、
 - 三、人語を發し、その内容には間違いが無い、
 - 四、証文結句△依如件▽の由来である、
- のモチーフを持つ。

百閒クダンは如何であろう。

月が西の空に傾いて〔一〕夜明けが近くなると、西の方から大浪の様な風が吹いて来た。私は風の運んで来る砂のほひを囁きながら、これから件に生れた^て始めての日が来るのだなと思つた。すると〔二〕今迄うつかりして思ひ出さなかつた恐ろしい事を〔一〕ふと考へついた。件は生れて三日にして死し、その間に人間の言葉で〔二〕未来の凶福を予言するものと云ふ話を聞いてゐる。こんなものに生れて〔三〕何時迄生きてゐても仕方がないから、三日で死ぬのは構はないけれども、予言するのは困ると思つた。第一何を予言するんだか見当もつかない。

△予言するのは困る▽——百閒クダンのこ、がユニークである。△私▽は△大勢の人の群▽に囲まれる。

あの大勢の人の群は〔一〕皆私の口から一言の予言を聞く為に〔二〕ああして私に近づいて来るのだ。もし私が件でありながら、何も予言しないと知ったら、彼等はどうなに怒り出すだらう。三日目に死ぬのは構はないけれども、その前にいぢめられるのは困る。逃げ度い、逃げ度いと思つて地団太をふんだ。西の空に黄色い月がぼんやり懸〔か〕つて〔三〕ふくれてゐる。昨夜の通りの景色だ。私はその月を眺めて、途方に暮れてゐた。

以下、予言を待つて件の一挙手一投足に注目する群衆、だまつたま、人々の一言一言に気を悩ます件||私、三日間の攻防が描かれる。件||私が過度に沈黙を続けるので、群衆側がかえつて不安を感じはじめ。三日目の暮方、予言を聞くのが恐い、件を殺してしまえと言う者が出る。△まわりの人々と自己との間に感じる齟齬▽（駒尺喜美¹⁶）の極るところで、こゝに「件」の重点をおく見方もある。だが、内田道雄が△第一義的にはやはり「私」の内面であろう▽と念押しした¹⁷ように、群衆は件||私にとつて焦燥の機縁でこそあれ根本的原因でない。

殺せと言つた声が息子の声と気付いた件||私は息子を見ようと伸びをした。

「そら、件が前足を上げた」／「今予言するんだ」と云ふあわてた声が聞こえた。その途端に「」今迄隙間もなく取巻いてゐた人垣が俄に崩れて、群衆は無言のまま、恐ろしい勢ひで「」四方八方に逃げ散つて行つた。柵を越え、棧敷をくぐつて「」東西南北に一生懸命に逃げ走つた。人の散つてしまつた後に又夕暮れが近づき、月が黄色にぼんやり照らし始めた。私はほつとして、前足を伸ばした。さうして三つ四つ続け様に大きな欠伸をした。何だか死にさうもない様な気がして来た。

△ほつと▽できたのが、予言しなければいけない状況から解放されたためであることは言うまでもない。

伝承のクダンと百閒クダンとの決定的相違は△予言▽能力の有無である。「件」に描かれた焦燥の根本的原因もこの△予言▽能力の欠如である。

クダンにとつて△予言▽とは何か。もともとクダン△予言するもの▽であつた。相手から当然に期待される自分の當為、しなければならぬこと、義務の謂であらう。

人々からひたすら義務の遂行を請求される、ところがそれに答へる能力が当方に無い、そんな場合に迫られてくる感じ。

私は百閒クダンを、一種の債務感覚のメタファーであると読む。

四

ところで前掲豊島與志雄「沈黙」の話は、伝承を紹介したのち、クダンの予言が△たゞ一度▽ゆえに重いという部分に着目し、△沈黙の効果▽へと話を移す。続くエピソードは△借金取り逐返しの名人▽某君についての一席である。△貧乏は単なる外的現象として気にもかけず▽洒然泰然と納まり返っている某君の前へ、借金支払の催促が来る。債権者が懇願・威嚇・訓戒等話術の蘊奥をつくして説く、その間、某君は一切弁解の口を利かない。相手が饒舌り疲れた頃、最後に一言「只今あいにく金がない」、そこで債権者も言葉つきで引退つたという。

右挿話の△某君▽は百閒がモデルではあるまいか。筆名の由来と称されるほど、借金は百閒に親しい話題であつたし、しかつめらしい貧乏△現象▽論が百閒独特の金錢△現象▽論を連想させるからである。

△金△は物質ではなくて、現象である。物の本体ではなく、ただ吾人の主観に映る相に過ぎない▽と百閒は言う（「百鬼園新装」）。続けて△或は、更に考へて行くと、金は単なる観念である。決して実在するものでなく、従つて吾人がこれを所有するといふ事は、一種の空想であり、観念上の錯誤である。（改行）実際に就いて考へる

に、吾人は決して金を持つてゐない。少くとも自分は、金を持たない。金とは、常に、受取る前か、又は費たつ後からの観念である。

受取る前には、まだ受取つてゐないから持つてゐない。しかし、金に対する撞憬がある。費つた後には、つかつてしまつたから、もう持つてゐない。後に残つてゐるものは悔恨である。さうして、この悔恨は、直接に撞憬から続いてゐるのが普通である。それは丁度、時の認識と相似する。〔略〕Time is money. 金は時の現在の如きものである。そんなものは世の中に存在しない。吾人は所有しない。所有する事は不可能である。万物流転、諸行無常。ならば、一体、一たび借りた金を、後に至つて返すと云ふ事は、可能なりや。これは「無恒債者無恒心」中の問いかけである。百問自ら答えていくわく、△小生は、本来不可能なる事を企て、益もなき事に苦しんでゐるのではないか。何年も前の事で、はつきりした記憶がないけれど、友人の出隆君が、借金に関する古代ギリシヤの哲学者の話をしてくれて、その学説のドイツ訳を写して貰つた事がある。今そのノートをどこに蔵つたか思ひ出せないし、第一、その哲学者の名前も忘れてしまつたけれど、うる覚えに覚えてゐる要旨は、人が金を借りる時の人格と、返す時の人格とは、人格が全然別である。同一人格にて金を借り、又金を返すといふ事は不可能といふより、むしろあり得べからざる事なのである。人は元来あり得べからざる事

ために勞するとも益なし。△ギリシヤの哲学者は未詳。

借金は払える道理がない。借りた自分と返す自分は別人格だから返金に齷齪するのは△本来不可能なる事を企て、益もなき事に苦しんでいるのだから。

これはおそらく百問クダンの種明かしに近い。「沈黙」の話「某君の段もひよつとすると百問・與志雄間で交された「件」楽屋落ちの披露であつたかもしれない。

私は百問の対債権者心労が「件」発想の核になつたと推測する。

ただし実生活で百問流説明が通用することはあるまい。同調する常人がいるとは思えない。

金銭話題は避けた方が無難である。代つて、クダン伝承を下敷にする。百問独得の債務感でなく、より一般化できる装置がこうして整えられた。

私は素材を重く視過ぎるであらうか。もしそうなら、現在「件」研究の風潮が伝承を余りに無視するため声高になつてしまつたためと弁解したい。

同様の傾向が、小松左京「くだんのはは」^{②③}評についてもある。クダン伝承の存在に注意せず、百問クダンしか考慮しない批評である。

○小松左京も〔略〕百問の「件」を踏まえた上で「くだんのはは」というパロディ小説を書いている（種村季弘）

○「百閒「件」を踏まえ換骨奪胎して小松左京が書いたのが「くだんの母」なのだ。小松の小説の舞台が神戸近郊だからといって、そのあたりに住む人に情報を求めたって何も得られはしない（呉智英）^②」

と。はたしてそうか。左京の創作時念頭に百閒作があったかどうか知らない。たゞ左京は噂を思い出して書いたと発言しているのだが、独自に伝承取材した可能性を除外できない。それを検討しないで天から百閒踏襲作と決めつけるのは早計であろう。

人牛か？ 牛人か？ 不思議なクダンの登場する小説も間歇的に発表される。

注

- ① 「ポップティーン」の89年9月号・90年3月号（未見）。90年4月1日刊号にも「人面大レポート」が載っている。
- ② 平2年6月22日付（8日カ）刊「FRIDAY」。
- ③ 90年6月12日付（11日）刊「東京スポーツ」の洪井君夫「噂の人面魚が笑った」。
- ④ 90年6月17日付（16日）刊「東京スポーツ」記事「人面魚大フィーバー 便乗産業絶好調」。同28日付刊「東京中日スポーツ」記事「全国各地で続々発見／正体見たり!!人面魚」。
- ⑤ 「日本庶民生活史料集成」十五（三一書房、71・8・20）。字体は通行のものに改めた。
- ⑥ 初出未見。「絵本徒然草」（河出書房新社、90・8・10）

- ⑦ 初出本文に拠る（字体は厳密でない）。「」内は初版本文。
- ⑧ 「内田百閒全集」三卷（講談社、昭47・2・20、管見後刷本）に拠る。
- ⑨ 昭8・4・1「経済往来」
- ⑩ 平山三郎「解題」（内田百閒全集）八卷（講談社、昭47・12・20）や、酒井英行「冥途」の温床（昭56・11・20「文芸と批評」）や、片岡憲「内田百閒「件」を読んで」（昭63・2・28「駒沢国文」）を指す。
- ⑪ 「解説」（冥途・旅順入城式）（旺文社、81・5・20）。これに川村二郎「牛人伝説」（昭58・4・1「海燕」）が「共感」を示すなど、影響力が大さい。
- ⑫ 稲田篤信「鳥山石燕画図百鬼夜行」（国書刊行会、92・12・21）所載田中直口「百鬼夜行」総説：序にかえて
- ⑬ たゞし近藤雅樹「妖怪名鑑」（図説日本の妖怪）（河出書房新社、90・7・31）や、宮武外骨「人と豚との合ノ子」（大14・11・1「明治奇聞」）やの、簡単な報告は省略した。水木しげるを見落とした。
- ⑭ のち同人著刊「岡山県の民俗地理」（昭50・7・5）に再録。
- ⑮ 「明治の演芸」のおかげで知った。マイクロ・フィルム版に当たり直して引用した。
- ⑯ 「漱石の弟子としての百閒と芥川」（昭46・5・1「法政」）。
- ⑰ 「内田百閒論」（昭47・2・20「山梨大学教育学部研究報告」）。
- ⑱ 昭5・11・1「文学時代」。
- ⑲ 昭8・4・1「週刊朝日」。
- ⑳ 昭43・11・1「話の特集」。
- ㉑ 初出未見。「書物漫遊記」（筑摩書房、79・1・20）。
- ㉒ 「怪談、マガイモノと本物」（91・2・1「TV cosmos」）。
- ㉓ 「小松左京自作を語る」（新潮カセットブック「くだんのはは」）（新潮社、昭62・5・22）。